**読書ノート　その20**

2018年8月24日

前回は、見るなの禁止を中心に日本人の罪悪感について報告しました。今回は、恥の文化およびキリスト教と仏教における罪の意識について報告します。

1. **作田啓一「恥の文化再考」(1967年9月、筑摩書房)に収録の論文P.9-26**

* 著者は関学大卒、会社勤めをへて京大哲学科入学、その直後に学徒動員、山口で終戦、看護兵として多くの広島被爆兵の死を目撃した。京大教授、2016年94歳で没。
* 著者は、R.ベネディクトの「日本は恥の文化」との見解にたいし単純すぎる見かたと批判を加えている。
* **まず、ベネディクトの恥の定義は**、公開の場で＝人の目があるところであざけりや拒否を受けたことで起きる感情。作田はこの恥の感情を「公恥」と名づけています。
* **これにたいして、作田は**あざけりや拒否がなくても、単なる他人からの注視だけで人は羞恥を感じることがあるという（私恥）。たとえば、医者と患者の関係で、医者が患者を患者としてではなく個人として注視した場合、患者は羞恥を感じるのではないか。(想像するに、たとえば女性患者がテニス教室で顔見知りの男性医師の診察を受けるのは、強い羞恥を感じるのではないか。)
* つまり、普遍的存在として見られるべきときに個体として見られると羞恥を感じる。
* その逆も同様。たとえば、恋人(個体)として見つめ合っている最中に客観的な対象として相手に観察されると羞恥を感じるのであろう。
* このように普遍化と固体化のズレがあるときに、注視されると羞恥が生じる。ベネディクトはこの私恥を考慮していない。
* **つぎに、作田は**ベネディクトの恥の定義は、恥の内面化を考慮していないという。たとえば、軽蔑に値する行為であることがしつけや教育によって子どもの心に植え付けられた場合(公共の場でゴミをすててはいけない等々)、注視がなくてもその行為をひとり恥じるようになる。
* **さらに作田はいう。**人の目があるところであざけりや拒否を受けたことで起きる恥の感情＝公恥は、日本人のみがことさら強く感じるわけではなく、欧米人も同様に感じるのではないか。公恥は欧米人にとっても強い規制力をもっているはず。
* **そうすると日本人に特徴的なのは、**私恥を強く感じることではないかと作田はいう。なぜならば、柳田國男いわく、日本人ははにかむ傾向が強く、はにかみへの強い関心から「にらめっこ」という遊びができた。つまり、日本人はそもそも他人の注視にたいして警戒的であり、そのうえで普遍化と固体化のズレが生じていれば他人の注視にたいしてより強い羞恥を感じる。
* よって、日本は恥の文化ではなく、私恥の文化である。

1. **兼子盾夫「罪の文化再考－キリスト教(パウロ)における罪の文化と仏教(親鸞)における罪業の比較思想的考察」湘南工科大学論文集、1995年Vol.29, No.1　CiNii論文検索より**

**キリスト教と親鸞・浄土真宗における原罪と救済**

* キリスト教の原罪とは、アダムとイブがヘビ＝悪の誘惑を受け、神の信頼を裏切り自らの自由を不正に行使して、リンゴは食べてはいけないとの神の命令に従わなかったこと。この結果、アダムとイブの子孫である我々人間に苦しみ・情欲の乱れ・不毛な生・死が生じた。我々はアダムとイブの原罪を引き継いでいる。（人間創生時のはるか昔の因果が現在の我々にたたっている）
* 浄土真宗の開祖・親鸞は凡夫としての罪業を強く意識したが、親鸞は我々凡夫を本来的に五逆(父母僧を殺す)、謗法(僧を謗る)を犯す罪深い存在、すなわち凡夫と見なしている。これは、浄土真宗の根本的な人間認識。
* 両者に共通してあるのは、人間の罪深さの自覚、しかも個人の罪業だけでなくそこから始まりすべての人間が等しくもつ根源的な罪の認識である。
* パウロ曰く、イエスへの信仰以外なにものも無効であり、唯一イエスへの信仰が我々を罪から救う。
* これにたいし親鸞においては、阿弥陀如来の誓願(すべての凡夫を救済するとの誓願)を信じ、それにすべてを任せなさいと説く。他力本願。
* 親鸞を宗祖とする浄土真宗では、罪業を何か実体的に捉えると執着になると教え、罪業に執着するなら、それは善根功徳（善いおこないは幸福をもたらす）に執着するのと同じであると説く（他力本願に反する）。ひたすら阿弥陀如来の誓願を信じよ。罪業の認識は阿弥陀如来の誓願を信じるひとつのきっかけにすぎないとする。
* ここで親鸞は、悪人こそ救われると悪人正機を主張する。
* 同様にイエスは「健康な者には医者はいらない。私は病人と罪人のために来た」と述べている。悪人にこそ救済が必要だと言う。悪人正機はキリスト教にもある思想。

**キリスト教と仏教における罪の意識の違い**

* キリスト教においては、罪は個人の自由意思の結果である。したがってその結果は、個人が負う。一方、仏教においては、現世における個人の意思は第二の原因であって、それに先立つ宿業＝前世の悪因が第一原因である。
* 仏教の因縁因果観から見れば、個々の人間の罪にたいしその人間に罰を加えることは、自我の存在にとらわれることである。そのような我執にとらわれること自体が迷いであると仏教では説く。
* キリスト教における罪は、個人が神と対峙し個人の意思によって超越的規範者の命じた掟に背くことであり、その結果は個人が主体的に引き受けなければならないものである。
* 日本的・仏教的な罪業とは、罪を犯す自己は仮の自我であり、自己の主体的・意思的な決断だけでは罪は実行されない。罪の実行には、実行主体に積もり積もった前世からの宿業がなければならない。つまり罪は完全に目己の自由な意思による主体的な行為ではない。ここにキリスト教的な罪業観との大きな違いがある。

以上

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

付録

以下は、73年目の終戦にちなんで、日本帝国軍人の精神主義と自爆攻撃について私見を報告します。

1. **日本帝国軍人の精神主義について－半藤一利「日本のいちばん長い日－運命の八月十五日」を読んで**

* 会社において過度の精神主義はコンプライアンスに悪影響があると思われるが(電通の鬼十則など)、日本帝国軍人の超過激な精神主義も先の大戦において様々な局面において判断を誤らせた一つの原因になったかと思われる。それではなぜ、彼らはこれほどまでに精神主義になってしまったのだろうか？　本書を読んでその理由がわかったように思いました。
* **まず終戦時の状況。**7月26日通告のあったポツダム宣言受諾か否かの大激論において、最後には国体は護持されるのかにつき喧々諤々の議論があり、結論を得られずやむなく天皇のご聖断を仰いだ結果、8月10日ポツダム宣言受諾と回答。このとき政府は「当該宣言に国体護持に反する条項は含まれていないとの認識のもと受諾」と回答した。連合国側からの返答は「天皇の権限はsubject to連合国司令長官となる」とあり、内閣はこのsubject toの解釈をめぐりまた々紛糾、最後は昭和天皇の「われに確信あり」とのご聖断が8月14日にあり、15日の玉音放送となった。「朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現狀トニ鑑ミ・・・」
* しかし、一部の若手将校はこれに反発、「これでは国体護持はできないっ！」と主張しクーデターを計画、8月14日～15日にかけ皇居乱入・要人殺害という暴挙に出た(数時間で鎮圧)。この蜂起を正当化するロジックは超過激な精神主義であった。それを示すいくつかの具体例は別紙。
* それではなぜ、日本帝国軍人は精神主義になったのか？　我思うに、
* **その根っこは**、天皇の神格化。つまり、明治憲法(明治23年)第3条「天皇は神聖にして侵すべからず」。この規定は天皇を「神」とまでは言っていないが、それに近い存在であるとする。
* **そのうえで**、国家神道を国民に普及させた。国家神道とは、天皇を天照大神の子孫＝現人神としたうえで古来の神道の衣を着せた宗教色の強い政治イデオロギー。小学校等々にも御真影、神棚が設置された。こうなると、国家神道が全国民をおおいつくし、国家体制・国家概念が国家神道という宗教的な思想とむすびついてくる。
* **この現人神は**、明治憲法第11条により「・・・陸海軍を統帥す」るという最高軍事司令官としての権限をもち、日本帝国陸海軍は神にひきいられた軍隊ということになる。
* こうなると、日本帝国陸海軍は宗教的色彩をおびざるをえなくなり、神秘主義ととても親和性が良くなる。
* そうなると、日本帝国陸海軍において、陸海軍大臣室、司令官室等には御真影がかざられ、神棚があって、毎日皇居にむかって遥拝するなどの宗教儀式が何の疑問もなくおこなわれる。
* **その結果**、軍人の思考・発言は容易に宗教的な信念とむすびつく。たとえば、「日本は神国である」「日本は不敗である」「神州不滅」等。
* これは、軍人としての具体的な行動・発言にも表れる。たとえば、
* 理由なしに「本土決戦にもちこめば日本は必ず勝てる」と陸軍は強硬に本土決戦を主張した。
* 弾薬食料がなくなっても「大和魂で戦えっ！」
* 弾薬が尽きると「突撃っ！」で全員玉砕
* 敵勢力偵察の結果「敵優勢」と報告すると「弱気の報告は最大の敵だっ！」と偵察隊を罵倒し報告を無視。

1. **自爆攻撃と武士道について－吉田紗知「8月15日の特攻隊員」を読んで**

* 著者は29歳、駒澤女子大卒、祖父の弟が玉音放送のあと特攻出撃したことを知りその経緯を資料やインタビューにより調べたもの。
* なぜ玉音放送のあと出撃したのか？　特攻隊司令官・宇垣中将は事前に日本降伏を知っており、彼は自決のため特攻出撃した。他の十数機を自己の自殺の道連れにしたと後日遺族等から批判あり。
* さて、自爆攻撃には飛行機のみならず人間魚雷・回天、人間機雷・伏龍、特攻ボート・震洋があった。
* この本を読んで、自爆攻撃が発案・実行された背景には、武士道があったのではないかとの思いにいたり、その理由を以下に記します。
* **時はさかのぼり1932年、満州事変**において「肉弾三勇士」（写真）が壮烈な自爆死をとげ称賛され軍神とあがめられた(事故死を軍が脚色したようではあるが)。本来、困難な任務をなし遂げ生還してこそ本当の英雄。しかし、日本でこの種の英雄の話を聞かない。日本では死なないと英雄になれないようです。
* 実行者が死んだらその任務は失敗。しかるに、肉弾三勇士の思想はその逆。死んではじめて英雄になれる。そうすると、そもそも死ぬことを肯定的にとらえる考え方があるのではないだろうか。
* **ここで思い出すのが**、「葉隠」の「武士道とは死ぬことと見つけたり」。また、武士道における死の典型は切腹。切腹は、いさぎよい・勇気ある行為として称賛される。このように武士道には、切腹＝自死を「素晴らしいこと」とみなす考えがある。
* であれば、より積極的な死は、なおいっそう素晴らしいことになるはず。つまり、志願して自爆攻撃で敵を殺し自分も死ぬという積極的な死。この考え方が自爆攻撃を発案・実行した根底にあったのではないか。
* なお、軍人は自分を武士になぞらえて行動・発言することが散見される。たとえば、阿南惟幾陸軍大臣は終戦の日に切腹自殺している。要人暗殺計画において「斬る」が「殺す」という意味で使われている。実際、近衛師団長は斬殺された。武士道が軍人に影響を与えていたように思われる。



* 死をよしとする武士道の考え方は、自爆攻撃だけでなく、全般的な命の軽視につながったのではないか。「貴様らは一銭五厘でいくらでも集められる」と兵士は消耗品あつかいで、無謀な突撃がくりかえされた。
* このような命の軽視は武士道の曲解か。「戦場に突入して討ち死にするのが勇ではなく、生きるべき時は生き、死すべき時は死ぬのが真の勇である」（佐々木さん2016.7.21報告の新渡戸稲造「武士道」）

以上